

哀歎抄（十）

尾崎 文英

うつくしきひとにあひたく夢さめて野外を見れば小鬼百合咲く

甲高き女子高生の声がする白きボールが秋のただなか

放心の旅とも思ふ潮風に襟立て居れば鴉来て鳴く

頼朝の恋路の社高き楠鷲が止まれば瀬音高まる

白秋の伊東小唄を碑に廻る新春の風松を吹く日に

一夜さに雪は降るつつ解けにけり思ひ出ごとの安らぎのなか

守護神を名告阿修羅があるなれど泪ぐみある少年の顔

みぎひだり清しき顔が静止しぬ真正面の仏と逢へば

乙女子も阿修羅を仰ぎ息をのむ遠見る眼涙浮かべて

ソプラノの美声ぞ響く園の窓喜寿と思へぬ風貌のひと

（『日本短歌協会会員』）

